

Tempus

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

Tempus Fugit — 時は過ぎゆく



FUKUZAWA YUKICHI MEMORIAL
KEIO HISTORY MUSEUM

No. 09

Oct. 2025



光陰如矢 かつてと今と

時事新報社、ここにありき

福澤諭吉が創刊した日刊新聞『時事新報』は、明治15年(1882)3月1日に三田の慶應義塾内で誕生しました。その後日本橋への移転を経て、京橋区南鍋町(現在の中央区銀座6丁目)の交詢社の隣地に長く本社がありました。「漫画」のコーナーが初めて登場したのはこの時代です。そして、漫画を『時事新報』の一大名物にしたのが日本近代漫画の祖とよばれる北澤楽天(1876-1955)でした。関東大震災で社屋が全焼した時事新報社は、皇居お堀端に新築移転します。同社が戦前最後の輝きとして「笑い」の伝統を発信したのはこの地でした。



昭和初年の時事新報社(さいたま市立漫画会館蔵)と、現在の同じ場所の様子。新報社旧敷地と隣接地が一体で岸本ビル(1980年竣工)が建ち、右端には明治生命館が見えている(大林龍平撮影)。

峯孝の《牧童》

慶應義塾志木高等学校 原 浩史

慶應義塾志木高等学校の体育館前に広がる芝生の一角に《牧童》と呼ばれるブロンズ像がある。仔牛とともに駆ける裸体の少年像で、台座側面に嵌められた銘板によれば、慶應義塾獣医学部専門学校（以下「獣畜」）の同窓会である蟹ヶ谷三田会の217名が、1982年11月2日、慶應創立125年の記念に寄贈したものである。かつてこの志木の地にあった母校の名を長くとどめるために、卒業生たちが建立した記念碑なのだ。

獣畜は1944年、日吉に開校した学校である。義塾は当初、農学部を創設を計画していたが、戦局の悪化から陸軍の反対に遭い、やむなく農業専門学校に変更。しかしこれにも文部省は難色を示し、獣医学部を独立させることでようやく1944年3月に認可される。校長は当初、小泉信三塾長が兼務。4月に試験、入学式は5月に行なわれた。

翌年は4月に2期生を迎えるが、5月には1期生全員が勤労動員の指示を受け、陸軍の研究所や伝染病研究所などで馬の飼育や管理に当たることになった。敗戦後の9月、日吉校舎に米軍が進駐。急遽移転先を探し、10月に川崎市の海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊跡地を借用して移転した。1946年4月に3期生が入学するも、戦後の学制改革で獣医学科は大学でなければなくなり、翌年以降の新入生募集を停止。他方、1947年9月に塾員松永安左工門から志木にあった東邦産業研究所の土地・建物が義塾に寄贈される。獣畜はここに移転して1948年1月に授業を始めたが、1949年3月の3期生卒業と同時に廃校となった。獣畜の同窓会が「蟹ヶ谷三田会」を称するのは、1期～3期の全員が学んだ校舎が蟹ヶ谷だけだからである。

代わって1948年4月、志木に開校したのが志木高の前身、慶應義塾農業高等学校である。初代校長には獣畜で主事を務めた河口真一が就き、獣畜2期生5名が1948年3月の卒業後すぐ助手となっている。うち3名は普通科に転換した志木高で理科の教諭となり、長くその教育を担った。

あらためて《牧童》を見ると、仔牛の後ろ脚後方に「1956 / T.mine」との陰刻があり、この像が1956年、彫刻家峯孝（みねたかし、1913-2003）の作と分かる。《牧童》は1954



年、北海道で牛乳の年間生産量が100万石を超えた記念に北海道酪農協会の依頼で作られた像で、1956年5月に除幕。いまま札幌の大通公園に立つ。この札幌の像と同じ原型から鋳造されたのが、志木高の《牧童》である。峯の作品が選ばれたのは、獣畜1期生で寄付者にも名を連ねる吉田貢が、当時、峯が教授を務める武蔵野美術大学で事務局長の職にあった縁という。では、《牧童》が選ばれたのはなぜか。

獣畜1期生の卒業50年記念誌には「躍動感のあるブロンズで、高校生に相応しい作品として選定された」とあるものの詳細は分からない。札幌の像は「乳牛感謝の像」と当時の新聞記事にはあり、畜産にまつわる像とはいえ、設置の意図には大きな隔たりがあるようにも思える。そこで注目したいのは、札幌の像の台座に刻まれた「乳と蜜の流れる郷に」との刻銘である。これは『出エジプト記』3章8節など旧約聖書に頻出する語句で理想郷のこと。ここでは文字通り、牛乳を豊かに産する北海道のことだろうが、《牧童》は楽園のシンボルとして作られたとも言える。だとすれば、母校を継いだ志木高がいつまでも生徒たちの楽園であるように、との願いが込められているのかも知れない。

なお、もう一つ気になるのは、かつて志木高の文芸部が発行していた校内誌『牧童』との関係である。『牧童』は1960年創刊で、1972年刊の6号で途絶えた後、1981年に再刊1号が出ている（1990年刊の9号で休刊か）。《牧童》の寄贈は、ちょうどこの再刊の時期である。タイトルの一致は単なる偶然なのか、どなたかご存じの方がいたらご教示願いたい。

師資相承

湘南工科大学教授
平山 勉

故・白井厚先生(2025年3月9日逝去)は、ご自身の研究室とは別に、共同研究の資料室を持たれていた。それは、「共同研究 太平洋戦争と慶應義塾」の開始以来、さまざまな資料が寄せられたことによる。この資料室には開放的な空気感があった。先生が、「時間のあるときは、いつでも手伝いに来られたし」とゼミ生に開かれていたからだろう。また、秘書の浅羽久美子さんと翠川紀子さんがいらしたこともあると思う。私は手伝いに行くゼミ生の一人だった。

白井先生は、寄せられた資料や新聞の切抜きをプリントにして、ゼミや講義で配布されることが多かった。手伝いはコピー取りから始まった。先生は、入手や報道までの経緯をよく話してくださった。とても贅沢な時間だった。やがて、資料整理もさせていただくようになった。A3サイズの大きなクリア・ファイルに、資料やそのコピーを追加して入れていったことを思い出す。ファイルは、著者や送り主である塾員の卒年別になっていた。これは、世代別に認識・意識・考えなどの変化をみようという先生の問題意識を反映していた。

今になって振り返ると、資料室は「問い」とつながりやすい空間だったと思う。日吉台地下壕を初めて見学したのもこの頃だった。当時の地下壕は、とても暗く、浸水もひどかった。私たちゼミ生は探検気分にもなって、騒がしく最奥まで見学した。そして、クロージングに際して、白井先生がおっしゃられた。「皆がにぎやかに進んでいるなか、僕は、ここから発信された命令を受けた人たちがどのような思いでいたのか、ということを考えていた」と。共同研究において、どのように問いを立てるのか——。気づきを得たあのときのことが今も記憶に残る。

浅羽さんと翠川さんは、塾関係者の戦没者名簿以外のことでテクニカルと仕事をされ、スケジュールの調整・管理なども上手にされていた。白井先生にも「指示」が飛び、先生もまたほぼその通りに「遂行」された。あるとき、御三方の揃っているところで、先生が「この資料室の雰囲気はどうか」というようなことを訊かれた。「この部屋の長は先生のはずだよな…と思うときがあります」と私が返し

すると、御三方は大いに笑ってくださった。フェミニズムのひとつの実践の場のように、当時の私は感じていた。そういう資料室でもあった。

白井先生は、共同研究が戦争体験をもつ塾員のネットワークに支えられていることを大切にされていた。「慶應だからこそできる」という矜持をつよくお持ちだったようにも思う。資料室が共同研究の「求心力」を醸成していた。同時に、良い意味での「遠心力」、つまり、発信力も支えていた。そのひとつが、毎夏の新図書館での展示だった。当時、1階の貸出カウンターに至るスペースに、ガラス製の展示ケースがあった。それを使った展示である。先生は、期間中のアップデートを欠かされなかった。展示スペースを、1階奥の掲示板コーナーにまで拡張されることもあった。有楽町マリオンでの展示会では、特製の大型ケースを作成して臨まれた。

春季企画展「ある一家の近代と戦争：上原良春・龍男・良司とその家族」も、常設展示コーナーにまで拡張されていた。白井先生と同じような思いで、都倉武之先生が展示を企画・実行されているように感じられた。拡張された展示では、小泉信三塾長の「塾長訓示」と上原良司氏に送られた日章旗が並んでいた。常設展示にあった別の日章旗が多く、署名で埋め尽くされていたのに対して、良司氏宛のそれには白地が目立った。そして、小泉塾長ではなく、林毅陸前塾長の署名があった。ここにひとつの「問い」が込められていると、少なくない人が受け止めたのではないだろうか。並んだふたつの展示品の前にひとりたたずみながら、白井先生のことを憶った。

今ひとつ「展示館だより」ということに寄れば、今年の「ある一家の近代と戦争」でも、その『図録』のボリュームとクオリティに感服している。白井先生も研究成果として高く評価されたのではないと思う。また、都倉先生と横山寛さんを中心とした福澤研究センターの皆さんによる継承を喜ばれたようにも思う。ただ、それらのことについて、あの資料室で、もう白井先生とお話できないことがさびしい。



寄せられた声から 企画展「ある一家の近代と戦争—上原良春・龍男・良司とその家族」の感想

展示スペースからは考えられないほどの情報密度で長居してしまいました。白亜の日吉校舎の龍男さんのお写真、良司さんの学生服姿など塾高時代の自分と地続きに感じ嬉しさと悲しさ、寂しさで目頭が熱くなりました。／戦争の悲劇と簡単に言えないほど、日常にあるものだと思うと余計悲しくて仕方なかった。／後世に語り継ぐため、常設展となると良い。／戦争が平和で幸せな家族の暮らしを破壊してゆく様子が伝わって来ました。／もう少し広い部屋でやっても良いのではないかと思います。／本当に私たちと同じ、ノートを取ったり寝坊しちゃったり、サボったり(ほほえましかった)…本当に何も変わらないのに戦争が、戦争のみが全てを変えたんだと思うと本当に心が痛んだ。今ある環境を大切に生きていきたい。／重い。／画面で紹介されていた家族写真の和やかさと、戦争の無慈悲さとの対比が心に残りました。／ここまで心を揺さぶられる企画は無い。静かな展示だがとても濃い内容である。／コンパクトながらとても密度が濃く見ごたえがあった。／淡々と戦死に至るまでの過程を追う構成に逆に圧倒されました。／この展示は大学の博物館だからできる素晴らしい試みだと思いました。／高齢者には展示物の字が小さかった!! その他良好!!／エリート故に国難に殉じた彼らをどう見るべきものなのか? 社会の先導者としての「Duty」を果たしたと考えるべきなのか。／80年を経て良くこれだけの資料が残されていたものと感激しました。小生は昭和10年生まれの90才。男3人、女1人の長男。あと10数年早く生まれていたら我等3兄弟も上原3兄弟と同じ運命を辿っていたものと思います。／兄弟の在学中の日記を見たことで、戦争が奪った「個」への意識が高まりました。自分は長野県出身かつ高円寺の県民寮から慶應義塾大学に通っていて、彼らとの共通点が多いこともあり、彼らの経験に思いを馳せることが出来ました。／私は長野県出身の大学3年生です。私も県民寮に住んでいて同郷の友人と見に来ました。同じ年代の学生が戦争で命を落とした事実と衝撃がストレートに伝わりました。／3人の生きた証を大切に保存されてきたご遺族の想いに至りました。貴校の学生であった3人の人生と足跡を、戦時の状況とともに回顧するような展示・企画は、今生きる若い学生たちにとっても多くのことを問ひかける重要な意義をもつものと存じます。

《特別座談会「上原家、80年後の証言」の感想》生きた証人の言葉は重い。資料の保存、発見、整理、保存、展示、塾スタッフの努力に頭が下がります。多くの人に見せたい、聞かせたい、感じて欲しい。／としえさんは意外にあっさりして戦争が日常にあるというのは、むしろこうなのかもと色々考えさせられました。／一人では何もできないと思うはずひとりひとりが変わることではしか社会は世界は変わらないという気持ちをもって事にあたっていきたいと考えています。考えを深める貴重な機会を設けていただき誠にありがとうございました。／ゲストの方の飾らない正直な話し方が印象に残りました。戦争体験というと、どうしても話をドラマティックにしがちですが、そういうところがなくて、良かったです。／予想をはるかに上回る面白さで感激致しました。／青木家の子供たちをかわいがっていたという現実がうかがえはるとするとともに切なくなりました。館林のエピソードは辛くなりました。／良司さんたちがとても身近に感じられました。戦争は人の命を簡単に無残にうばっていくものだと思います。／房子さんがご家族3人で麦畑に隠れて泣いたお話が強く印象に残りました。遺品の目録作成は大変なお仕事かと存じますが、彼らが生きていた証を後世のために残していただけること心より感謝申し上げます。／今回のお話で何といっても戦争の悲しさは実際に関わりのある方からお伺いしなければ本当のことは分からないのだとよく分かりました。／今後とも戦争と平和について心の底から伝わり、考える企画をよろしく願いいたします。／亀岡さんが良司さんを知る方々を尋ね、丹念な調査を続けてこられたことが、よくわかりました。／父も戦争の話をしていない人でした。／このような場を提供してもらった慶應義塾に感謝したい。戦争を語り継ぐ新しい世代に期待したい。／非常にメッセージ性の高い座談会を拝聴できたと思います。／美化してはいけない、本心だと思いました。優秀な若者を…何てことしてくれたんだ!!／島根から上京し東京で浪人、現在は三田で学んでいる私と誠に勝手ではございますが良司さんの姿と重なりました。妹が同じく上京し、今日は実家から出てきた母を妹と迎えに行きました。館林で良司さんに会えなかったお話を伺い、会える幸せをかみしめました。／上原としえさんが「(3人の兄弟の死を)考えないようにしてきた」と仰ったことが戦争の悲惨さを象徴的に表していると感じました。／三兄弟の静かな無念を感じました。／ごだわりが随所に見てとれた内容だったと思います。良司さんだけにとらわれず、3人のご家族のことをいっぱい知ることが出来ました。

企画展示室の今後の予定

慶應義塾福澤研究センター 新収資料展2026
2026年1月10日(土)～2月7日(土)



慶應義塾公式グッズサイト (<https://keiogoods.jp/>)
からもお求めいただけます。



既刊図録より



開館記念図録
2021年/800円



曾瀬中條建築事務所と
慶應義塾
2023年春秋/2800円



慶應義塾と戦争
—モノからヒトへ—
2024年春/2500円



藤山一郎がゆく!
—「若き血」から国民栄賞賞まで—
2024年秋/1400円



ある一家の近代と戦争
—上原良春・龍男・良司とその家族—
2025年春/2500円

基本情報

開館年月日 2021年7月5日
空間デザイン 横総合計画事務所
展示設計製作 株式会社トータルメディア開発研究所
床面積 常設展示室: 280.44㎡ 企画展示室: 60.99㎡

スタッフ一覧

館長/平野 隆 副館長/都倉 武之
所員/西澤 直子、阿久澤 武史(兼運営委員)
所員/クラシエ、ジェフリー ヨシオ、小山 太輝、齋藤 秀彦、
末木 孝典、山内 慶太、結城 大佑
専門員/横山 寛 事務局/福澤研究センター 兼務

来館者数

2025/5	2025/6	2025/7	2025/8
5453名	2555名	3424名	5488名

諸記録

《春季企画展 6月19日～8月30日
ある一家の近代と戦争—上原良春・龍男・良司とその家族—》
・6月25日 戦争遺跡としてめぐる三田キャンパスツアー
・7月 1日 戦争遺跡としてめぐる日吉キャンパスツアー
・7月12日 特別座談会「上原家、80年後の証言」
・7月17日/8月4日 ギャラリートーク
《大阪特別企画展Ⅲ 7月10日～8月31日
慶應義塾と戦争—モノからヒトへ—》(慶應大阪シティキャンパス)
・8月 7日 講演会「戦時中の大学と学生を語る」
・8月 8日 講演会「慶應義塾と日吉台地下壕—モノからヒトへ」
・8月31日 講演会「慶應義塾出身の戦没アスリート」
講演会「硫黄島で戦死したオリンピックの父河石達吾について」
・7月10日/8月8日/8月31日 ギャラリートーク
《会議》
・6月26日 2025年度 第1回所員会議
・7月15日 2025年度 第1回運営委員会

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館だより

テンプス
Tempus No.09

発行日 2025年10月16日(年2回発行)

印刷 (有)梅沢印刷所

編集・発行 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 電話 03-5427-1200 <https://history.keio.ac.jp/>

各種SNSはこちら



@keiohistory



@keiohistory



@keio_history